

十時半睡事件帖
と き は ん す い

(かたな)

白石二郎



かな とうきはんすい しけんちろう
刀 十時半睡事件帖

しらいし いらろう
白石一郎

© Ichiro Shiraishi 1990

1990年10月15日第1刷発行

1992年10月30日第5刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——有限会社中澤製本所

落丁本・乱丁本は小杜書籍製作部あてにお送りください。
送料は小杜負担にてお取替えます。なお、この本の内容
についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。

(庫)

ISBN4-06-184773-2

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

刀

十時半睡事件帖

白石一郎

講談社

目次

第一話 刀

五

第二話 走る男

三九

第三話 妖しい月

七四

第四話 異母兄妹

一二三

第五話 楽しいおとこ

一五一

第六話 卵

一九三

初出誌一覧

二二七

解説

石井富士弥

二三八

第一話 刀

—

福岡藩黒田家の城下町では身分禄高に応じて侍たちが、定められた地域に、似たような家屋敷の廂^{ひさし}を並べて住みついている。

荒戸町は福岡城の西北にあり、城のお濠に面した一番丁から北へ海の方角へ向かって二番丁、三番丁とつづき、海岸に聳^{そび}える丘陵の麓^{ふもと}にある五番丁でおわっている。

ここには御馬回りと呼ばれる黒田家の中堅士族たちが集まっていた。

御馬回りの総人数は五百五十人で、その御役目も多種多様だが、大別して、藩の財政面を担当する文官畑と、軍事行政面を担う武官畑に分けることができる。

中川勘解由^{かかげゆ}は荒戸町三番丁の住人だが、数ある御馬回りのなかでも、典型的な文官畑を歩いていた。

二十歳で郡奉行の手付^{てつけ}となり、勘定方に転じて大坂の蔵役人をつとめ、のちに浦奉行、郡奉行

をへて、一昨年ついに勘定奉行に就任した。

このところ福岡藩の財政がひとところにくらべて安泰なもの、ひとえに中川勘解由の努力と才腕、適切な処置によるといわれている。

勘解由はことし四十二歳、職務に熱心のため、城中の仕事を屋敷まで持ち帰って、夜おそくまで机に向かっていることがめずらしくない。

今夜も同じで、妻女のおりくは頃合いを見て、茶と菓子などを夫の書齋へ運んでゆく。

「あなた、ひと休みなさいませぬか」

勘解由は机上に大きな絵図面をひろげ、虫眼鏡を左手に持って、右手の筆で図面に何やら書き込んでいた。おりくがうしろから覗きこみ、

「その絵図面は……またあの埋め立て工事の……」

「うん」筆を置いて勘解由はふり返り、おりくの運んできた茶碗に手をのばした。

「りく、わしはあきらめきれぬ。名島の海岸から香椎の浜へかけて、塩づくりのための大きな塩田を開発したい。これができれば、当藩の財政は、どれほどか豊かになろうものを……」

「でも、御重役の皆さま、それに大勢の方々が、その埋め立て工事にはきつう反対をなさり、あなたは何度申しあげても、結局は通らぬとか」

「そうじゃ、頑迷無智なやからには、道理が通じぬ。それは、この工事には大金がかかる。当藩の財政が安定しているいま、何もそんな大金を投じてまで……というのがあの連中の考えじゃ。

ばかな！ 御当家がいま一見、豊かにみえるのは、さいわいここ四、五年豊作がつづいた……それだけの理由じゃ。いまに早魃かんぼがくれば、ひとたまりもない。勘定奉行のわしには、それがよくわかる」

「それをくわしく仰せになれば、皆さまで納得してくださるのでは」

「だめじゃな。勘定畑を歩んできた者はともかく、武刃ぶへを売りものにして侍たちには、これほど自明のことが一向にわからぬ。刀さえ振り回せば、金が集まるものと思っておる。侍の武刃などというものが、今どき何の役に立つか。わしはあの連中に、いちどいやというほど、それを知らせてやりたい」

眼鼻立ちがくつきりして色白の端正な勸解由の面貌めんぼうに朱の色がのぼってくる。

このての話になるといつもこうだ。ちかごろでは武官たちに対する勸解由の反感、ひそかな軽蔑は、どうやら憎しみにまで増幅されているようだった。

しごと熱心のあまりとはいえ、おりくにはちよつと不安だ。世間のお人はふつう年齢とともに円くなり、人づきあいにもそつなくなるものだが、この夫の場合は逆のようである。しごと一途はよいとしても、そのため人柄がしだいに刺々とげとげしくなってきた。

若いころのほうが、もつと穏やかだったと、とき折、おりくはひそかに溜息をつくことがある。

「ま、あのやから、どうしようもないわ。言うだけ無駄じゃ。ところで彦太郎はどうした」

と勘解由が話題をかえた。おりくはほっとしながら、

「はい、博多の中島町に^{かみがた}上方の人形浄瑠璃が来ていると申して見物に出かけましたが……それにしては帰りがおそうございますねえ」

「人形浄瑠璃？ 彦太郎め、そんなものを……はっはは、のんきな奴じゃ」

ひとり息子だった。姉のおまつとは二つちがいの十七歳、おまつは縁談もきまり、ちかちか嫁ぐことになっているので、中川家は親子三人の暮らしになる。

彦太郎は父親よりも母のおりくに似ていた。小さいころから気性のつよい乱暴者だったが、長じて武芸を好み、十歳のときに藩の新陰流の道場へ通いはじめ、今ではもう目録を得ている。まだ御役目につく年齢でもなく、日々、好きなことをして暮らしていた。

その彦太郎が帰ってきたのは深更である。人も寝静まった四ツ半どき（午後十一時）ごろ、裏のくぐり戸から入ってきた。

台所のちかくにおまつ部屋の部屋がある。おまつは物音に気づき、燭台を手にして台所へ顔を出し、土間に佇んでいる弟を見た。

ほとばしる悲鳴を危く手で口に蓋をして押さえ、衣服を血で染めた真つ青な顔の男が、弟に間違いないことをたしかめた。

「彦太郎、どうしたの……。ひどい怪我をして」

土間へ裸足で駆けおりそばへ寄ってくる姉の手を、彦太郎は払いのけて、うしろへ退った。

「怪我ではない。返り血です」

「え？」

「姉上……」

へなへたと土間に坐りこんだ彦太郎から事情を聞くと、おまつは彦太郎と同様に青ざめ、寝所に入っている母のおりくを呼び起こしに行った。

おりくが足音も慌ただしく駆けつけてきた。

彦太郎は項垂れて土間に坐りこんでいる。おまつがふるえる声で事情を母に告げた。おりくの顔からも血の色が失せた。

「父上はまだ起きておられます」

と、おりくは懸命に思案をめぐらしながら、いった。

「どうすればよいか。私も女の思案にはあまります」

おりくは息子を立たせ、泥にまみれた袴はかまの裾を払い、おまつに命じて汲んでこさせた水で、つつ立っている彦太郎の足を洗い洗った。

「さ、彦太郎、何もかも父上にお話しなさい。どうすればよいか、父上が考えてくださるでしょう」

彦太郎が唇をかんてうなずいた。

血に濡れた衣服はそのままにして、おりくとおまつが左右から彦太郎を支えるようにして、灯

が洩れている勘解由の書齋へ向かった。

勘解由は虫眼鏡を片手にして絵図面に見入っていたが、顔を揃えてやってきた妻子をいぶかしそうに振り返った。

彦太郎が進み出て父の前に坐り両手をつく。黙って息子を見ていた勘解由が、

「その血のりはどうした」

「父上っ」と彦太郎がかすれ声をふりしぼった。

「申し訳ございませぬ。つまらぬ行きがかりにて、人ひとり打ち果たしてしまいました」
勘解由の両の眉が釣りあがり、こめかみに血管が浮き出た。

「事情を申せ」

声は静かだ。

「はい、中島町の浄瑠璃の掛け小屋で、御城代組山田貫兵衛どのの次男、新之介と口論に及び、中洲の畑へ出て、二人で決闘致しました。新之介は安部流三宅道場の門人、私は新陰流村上道場の門人ゆえ、逃げるわけにもゆかず、とうとう打ち果たしてしまいました」

「死んだのか、相手は」

「はい」

沈黙が重苦しく勘解由の書齋をつつんだ。腕組みして宙を睨んでいた勘解由が、「彦太郎」と息子の名を呼んだ。

「そなた先ほど、つまらぬ行きがかり……と申したな」

「はい」

「人ひとり打ち果たした以上、つまらぬ行きがかりではすまぬ。そのような場合には、よんどころなき事情にてと、このように申すものじゃ」

「はい」

「りく」と勘解由は視線を妻に移し、

「彦太郎を風呂に入れてやれ。それから湯漬けなど喰べさせるように」

「はい」

「彦太郎、ひと風呂あび、かるく食事をせよ。どうすればいいか、人ひとり殺めたお前じゃ。覚悟はできておろう」

あなたつ、とりくが叫び、おまつが父上、と呼んで、膝を乗りだした。

勘解由はすがりつく女たちの視線をはねのけるように、

「彦太郎、腹を切れ」

と、つめたくいった。

二

中川勘解由の嫡男、彦太郎の刃傷事件と、父親の勘解由がとった果断な跡始末は、翌日になる

と、早くも福岡の城下にあまねく知れ渡った。

十時半睡も今は御藏奉行をつとめる俵の弥七郎から、この件についてあらましを聞いた。

福岡藩黒田家の総目付をつとめる十時半睡は六十五歳、名は一右衛門といい藩内のあらゆる奉行職を歴任したあと息子に家督をゆずり在職中に加増された家祿をすべて返上して隠居した。半分睡つてくらすという洒落で隠居名を半睡と号したが、福岡藩の目付制度の変更によって十人目付の総帥として再び起用され、息子の弥七郎と共に出仕している。親子づとめは弊害も多いとして禁じられているので、十時家の父子の場合は異例だといえた。

総目付として再出仕してからは、眠つてくらすわけにもゆかず、藩内によろず相談役を押しつけられ、何かと忙しい毎日だ。

「父上、さすがは勘定奉行中川勘解由どの、たった一人の息子に腹を切らせ、御城代組の山田貫兵衛の屋敷に今朝、自ら詫びに参られたそうでござる」

かつて勘定方に勤務していた弥七郎である。勘解由とは面識もあり、それだけに興奮している。

夕餉の席で話を聞いた半睡は眉にしわを寄せて、しぶい顔だった。

「むかしも今も、若侍たちの刃傷沙汰には困ったものじゃ。それにしても中川勘解由、気の毒なことよの」

「相手の山田貫兵衛は士分のなかでも最下級の御城代組、わずか十石二人扶持の軽輩でござる。

飛ぶ鳥落とす勘定奉行の地位にものをいわせれば、何とかもみ消すこともできたろうにと、そのように噂している者もございます」

「それはなるまい」と半睡はこたえた。

「相手が軽輩なればこそ、中川どのは却って氣をつこうたのであろう。勘定方の下役には御城代組から出ている役人たちも多いことじゃ。勘定奉行としては今後の仕事のためにも、私ごとで勝手なまねはできぬ道理じゃ」

「しかし父上、中川どのは勘定奉行を退きたいと、御重役に辞表を出されたそうでごさる」

「辞表？　しかし弥七郎、いま中川どのが奉行を退けば、勘定方はどうなる。あれほどの者は、他にはおるまい」

「はい、それで勘定方は今朝から誰も仕事の手につかず、もう大変なさわぎでごさる」
黙って二人の話を聞いていた嫁のお夏が、

「勘解由さまの奥さま、たった一人の男のお子を亡くされて……ほんとにお氣の毒でございます。もし吉太郎が成長して劍術を学び、そんなことになったらと思うと、ひとごとではござりませぬ。父上さま、若いお人たちの刃傷沙汰、何とかならぬものでしょうか」

真剣な表情で半睡を見る。男児をもつ親として、身につまされているようだった。
うーんと半睡は腕を拱こまねき、何ともこたえかねていた。

じつさい藩内での若侍たちの喧嘩、刃傷は昔から絶えることがなかったのである。

半睡が認めているように中川勘解由の勘定奉行としての功績については、藩中で疑う者はいなかった。

ここ数年豊作がつづいたとはいえ、現在の福岡藩の繁栄は、財政の三大支柱といわれる櫛、鶏卵、石炭などの国産品を上方で強力に売り出し、一方では適切に藩札を発行し、財政の収支の均衡をとってきた勘解由の手腕によるところが大きかった。

そのため勘解由の辞意がかたいことを知ると、同じ勘定方はもちろん各奉行所の役人たちが動揺した。

波紋は家老、中老など重職たちのあいだにも拡がり、異例のことだが二千石の中老立花平左衛門が、一奉行職にすぎない勘解由のもとに、辞意の撤回を求めて、わざわざ出向くことになったのである。

中川勘解由は辞表を提出してிரை、勝手に出仕をとりやめ、荒戸三番丁の屋敷で蟄居してゐた。屋敷から一步も外へ出ず、訪客もことわり、息子の喪に服している。

勘解由にかぎらず、中川家は若党、中間にいたるまで彦太郎の死で、沈みきっていた。

とつぜんの訪客が中老の立花平左衛門とあつては、さすがに追いつ返しもならず、面やつれした勘解由は客座敷で対面した。

「のう勘解由、息子の不始末の責任をとつて、奉行職を退きたいというそなたの気持ちは、わかる」

平左衛門はさつそく話を切りだした。

「しかし、長政公らしい武勇をもって世に聞こえた黒田家では戦国の尚武の氣風が色濃く伝えられている。しぜん武を競うあまり、若い者たちの喧嘩、刃傷沙汰も、昔から決して珍しいことではない。そなたと同じ思いをした親が、この藩内にはいくらもいる。しかもそなたがとった跡始末はさすがと褒められこそすれ、非難をこうむる筋合いは全くない。このさい職を辞すことだけは、どうか思いとどまってもらいたい」

懇切丁寧な話しぶりだった。中老職が自ら来訪しての依頼である。勘解由としても無下にことわることはできない。

「これはわし一人の意見ではないぞ。そなたが以前から申し出ている塩田開発の件についても、もういちど検討し直してもよいと、御重職一同、内々に申し合わせている。どうじゃ勘解由、何とか思い直してくれい」

勘解由は恐縮して項垂れていた。あれほど反対された塩田開発についても、重職たちが一步をゆずって再検討するという。まったく異例の留任勧告だ。

勘解由は重職たちの好意を素直に受ける腹をきめた。しかし死んだ彦太郎の菩提のためにも、このさい申し出ておきたいことがある。

「さように仰せられては、私ごときがたつて御辞退することになりませぬ。しかし奉行職にもどるについて、ひとつ御願いがござります」